

中国の新年

# 「春節」は爆竹と花火で明けた

1月某日

西双版纳(シーサンパン) 放浪の旅のルート探しのために昆明を訪ねたところ、駅前広場は立錐の余地もないほど人、人で溢れていた。これはどうしたことかと驚きつつコンコースへ向かうと、駅舎の入り口でシャットアウト。行き先方面別に何重にも列が決められていて、切符購入者以外は立ち入り禁止になっていた。係員がかなり立てるハンドスピーカーの音声と雑踏と人いざれの中で、はたと気が付いた。「春節」の里帰り切符の前売りが始まったのだ。雲南テレビのニュースでは例年25日あたりが混雑の始まりだと言っていたが、今年はかなり早い。一般人用とは別に軍人と学生用に特別窓口が設けられているのが、現在の中国を物語っている。

CCTVのニュースでは、今年の「春節」期間中に中国全土で7億人が移動するそうだ。その主な足が鉄道だが、マイカーブームの中で、自家用車での帰郷や行楽が増え、北京・上海ではレンタカーが足りなくなつたそうだ。ちょっと風変わりなところでは、1万台のバイク帰省者がパトカーに先導されて走っている映像が流れていた。急速

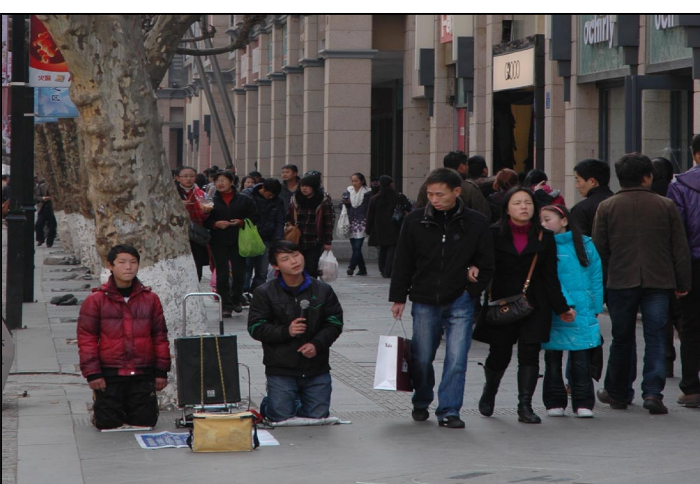


1月13日の昆明駅の様子。各列の最前面に人民解放軍の兵士が立ち、武装警察官が物腰柔らかな中にも鋭い警備の眼差しを放っていた。

に自動車文化が広がった中国では、ドライバーの多くが免許を取得して日が浅く、運転技術は未熟な上に高速道路にも慣れていない。加えて運転マナーは最低レベル。連日、雲南テレビは交通事故のニュースを流し安全運転を呼びかけていたが、中国で自動車を運転すること自体が「無謀」というのが実感だ。

「春節」に関連して、「囤票(トゥンピャオ)」、「拼车(ピンチャ)」、「扒窃(パーチエ)」という言葉を知った。「囤票」とはダフ屋から手に入れた切符のこと。騙される人が続出している。人の弱点をついて金を儲けようとする人間はどこにもある。「拼车」とは「相乗り」のこと。お金のない大学生に大受けてインターネットで専門のサイトができるほどの人気だそうだが、事故の補償争議が起きている。「扒窃」とは「スリ」のこと。人の集まる所にいないはずはない。残念なこと中国ではスリ・置き引きは日常茶飯事。自己防衛あるのみだ。

1月13日(木) 南屏街(ナンピンジエ)へ行った。新年の買い



二人は兄弟だろうか。兄とおぼしき年上の男の子がカラオケに合わせて歌っていた。「募金」してくれる人が現れる度に二人して「謝謝」と言って頭を下げていた。

物をするたくさんの市民で賑わっていた。歩行者天国となつている正義路(シヤンイーロウ)の中程で高校生らしい男の子が二人、道路に膝まづき歌を歌っていた。なかなか上手い。近寄ってみると彼らの膝元になにか書かれた紙が広がってあった。読んでみると「母親が癌を煩い手術をさせたいが家に蓄えがなく、治療費が高くて薬代も払えない。学校を中退して働き始めたが仕事はなかなかないし、収入は生活費に消えてしまふ。どうかみなさんの善意をお願いします」という内容だった。後日、同じ場所に別の親子が座っていた。「父親は元解放軍兵士で国に尽くし、家族は何不自由なく幸せに暮らしていた。が、父親が癌を煩い他界し、今は収入もなく底の生活を送っている。恥を忍んでみなさんに支援をお願いします」というような内容の文書とともに、幸福そうな家族写真や父親の軍服姿の写真、身分証明書などが並べられていた。真偽の確かめようはないが、最も優遇されているはずの元解放軍兵士の一家が底の生活を強いられているとは、驚きだった。しかも、こうした底辺の生活をおくる人々を至る所で目にする。雲南テレビのニュースで「城市低保人員每人可領150元过年费(市内在住の低所得者に春節过年費150元を支給)」と言っていた。経済格差はますます拡大し、最低生活の保障さえ十分に機能していない中国の現状を見る思いがした。

2月2日(水) お馴染みになったカフェバー Kawana Cafe のオーナー、ジェームズ氏が私とパッドさんを一族



ジェームズ家の年越し晩餐会は、乾杯、乾杯の大賑わい。互いに平穏無事な1年を祝い、平穏無事な1年を念じ合っていた。豪華な中華料理が次から次に登場し、テーブルはまたたく間に料理の山となった。部屋に戻ると外は花火と爆竹の大競演。一晩中続いた。

の年越し晩餐会に招待してくれた。彼の話では、「春節」の前夜「除夕(チュウシ)」に家族揃ってご馳走を食べ、食後はテレビで芝居や映画を見て過ごすのが慣し、日本のようなお参りはしないそうだ。また、日本の「お年玉」と同じく、「紅包(ホンパオ)」という習慣があるそうだ。彼が子どもの頃は100元貰ったそうだが、現代は1000元が通り相場だそう。金額はもしかすると彼の一族の話かもしれない。彼が経営する中華料理店は北京路の北、金星(ジンシン)立交橋のすぐ側にあるお茶の間屋街の一角にあった。とても立派なお店である。約束の午後7時に少し遅れたにもかかわらず、一族の方々が温かく歓迎してくれた。次から次へと料理が運ばれてくる度に、一族の方々が「遠慮は禁物。どんどん食べる」とわれわれの皿に料理を取り分けてくれる。中国人は客を大切にす。

アヒルのレバーペーストと山葵醤油の是妙の美味しさを味わいながら、「いまいちはん大切なものはなんですか」と叔父さんに聞いてみた。叔父さん、右手の親指を人差し指と中指の間にこすり合わせて、「銭(チエン)」と笑った。義理の弟さんは「家族の安全と健康」と言っていた。他の人たちからも「健康と平穏」という答えが返ってきた。月並みな返答だが、ある程度の経済的豊かさの中で平穏無事に過ごしたいという願いは万国共通した意識のようだ。「夢想(マンシアン・夢)」を聞いてみたところ、やはり「健康」や「平穏」という答えが返ってきた。ジェームズ氏はごく近い将来にももう一軒別のレストランを開きたいと言っていた。最高のライブ音楽と最高の西洋料理を楽しむ最高のレストランだそうで、単なる夢

ではないようだ。奥さんは日本に行ってみたくて言っていた。北海道と温泉に入るのが夢だそう。日本の温泉は「裸で入る」と言ったら「ええ」と驚いていた。9時過ぎ、ジェームズ氏に送られて帰宅。あちらこちらから花火の音が聞こえた。10時過ぎ、花火と爆竹がいつそう激しくなる。11時をまわった頃、破裂音は「あちらこちら」から「至る所」に変わった。11時半過ぎ、一時静かになったが、12時少し前、待ちきれなくなった連中だろうか、打ち上げ花火を連発し始めた。これが呼び水になったのか、四方八方から打ち上げが始まった。12時、昆明市内は一大花火大会と化した。アパールの通りでも花火と爆竹が鳴り響き、窓のすぐ向こうで大輪の花が咲いた。花火と爆竹は夜通し続いた。

2月3日(木) 「春節」の朝、昆明は雲一つない青空に覆われた。いつもならクラクションの音で騒々しい街がひっそりとしている。時折、爆竹がなる程度で静けさがいつそう際立って感じられた。春の日差しの中で散歩を楽しんでいる人々を眺めていたら、昨夜の会話を思い出した。「健康と平穏」。平凡な願いだが、現実の中国はそれさえ「持てる人」と「持てない人」がいる。昆明の街を歩いてみると、中国はさまざま矛盾を抱えたまま、急速で転がっているように感じる。